

睡眠ポリグラフ検査の重要性についての意見書（令和 8 年度改訂版）

1. 声明の背景と目的

睡眠ポリグラフ検査（polysomnography：PSG）は、睡眠構造、呼吸、循環、筋活動などの生体情報を同時に記録し、睡眠障害の病態を総合的に評価するための中核的な検査である。とりわけ、睡眠障害の鑑別、併存症・合併症を有する患者の評価、ならびに簡易モニターで診断が確定しない場合の精密評価には、医療機関内で実施する監視下 PSG が極めて重要な役割を担う。

2015 年の日本睡眠学会声明では、閉塞性睡眠時無呼吸（obstructive sleep apnea：OSA）の診断に簡易モニターが導入されるなかで、検査の簡便性のみを優先せず、病態に応じて PSG を適切に選択する必要性を示した。その後、簡易モニターの普及に加え、在宅で睡眠状態を評価する機器や解析技術が多様化し、検査機器の定義や臨床現場における運用の基準を明確にした運用が、従来以上に求められるようになってきている。

本声明は、特定の検査法を一律に優先することを目的とするものではない。患者の臨床像、疑われる睡眠障害、併存症・合併症、検査の精度管理、および各装置から得られる情報の範囲を踏まえ、医療機関内（監視下/非監視下）PSG、在宅で実施する PSG 検査、簡易モニターを適切に選択するという日本睡眠学会の基本的立場を示すものである。

2. 検査手法の位置付け

睡眠検査技術がどれほど多様化しようとも、医療機関内監視下 PSG が睡眠医学における普遍の「ゴールドスタンダード」とであるという位置づけは揺るぎない。医療機関内監視下 PSG は、専門スタッフの監視下で多角的な生体情報を記録し、あらゆる睡眠障害の正確な鑑別において基盤となる検査法である。

近年整理されつつある在宅環境での検査手法（在宅 PSG および簡易モニター）は、医療機関内 PSG と同等のものではない。検査手法の選択は、単なる利便性や医療経済的な効率性の追求ではなく、患者の臨床症状を踏まえて、リスクおよび検査の精度管理を最優先に考慮して決定されなければならない。

3. 医療の質を担保する基本原則

簡易モニターや在宅 PSG の導入は、医療アクセスを向上させる可能性を持つ一方で、医療従事者の直接的な監視がないため、データの欠損や診断精度の低下というリスクを常に内包している。したがって、検査形態がどのように簡略化・効率化されようとも、最終的な診断および治療方針を決定する上で、医師等に必要なかつ十分な情報を提供できるものであるべきである。

つまり、医師は、単に自動解析の結果やスコアリングデータのみに依存して診断を行ってはならない。必要に応じて自ら解析前のローデータ（生体情報）にアクセスし、その妥当性を確認する体制を整えるべきである。また、在宅 PSG などにおいてセンサー脱落やアーチファクトの混入等により信頼できるデータが得られなかった場合は、不完全なデータに基づく診断を避け、速やかに医療機関内 PSG などの上位の検査手法へ移行させるなど、適切な臨床的判断を下さなければならない。

現時点での本邦における PSG の運用指針をエキスパートコンセンサスとして別途発信する。

2026 年 8 月 28 日

一般社団法人日本睡眠学会
理事長 内村 直尚